峰地光重翁を悼む

峰地光重氏が生活綴方運動における、いわゆる東北派に対する西南派の代表的存在であったことは、周知のとおりである。前者の中心思想をリアリズムとすれば、後者のそれはロマンチシズムということもできるであろう。まさしく氏の印象は、本質的なロマンチストである。

その峰地氏が、旧臘二十八日午後十時三十分、鳥取県西伯郡中山町の自宅で永眠した。享年七十九歳。令息利平氏名儀の死亡通知のはがきには、「かねて、『生と死とは対立した概念ではない。永遠の生命はその統合にある』と申しておりましたが、そのことば通り、安らかに瞑目いたしました」とあった。その余白にはまた、「偶感」と題する、つぎのような故人の遺詠二首が刷り込んであった。

白雲をうなじにまきてちはやぶる大神山はたふときろかも

舎利体の背戸の椎の木くすしもよかんざう茸のたたなはりさく

伯耆大山（ほうきだいせん）の裾野が北方にひろがり、日本海へゆるく傾斜してゆく途中、海岸からおよそ三キロメートルの地点に、樹齢千年に及ぶというタグ（ツガの一種）の木をまじえた巨木の森に囲まれて、その家はあった。峰地氏の人柄から、わたくしは、広大な裾野を擁する大山の雄姿を連想するのが常であった。その峰地氏が、この山を「大神山」と仰いだ気持は、たいへん自然なことと受け取られるし、この山を尊ぶ歌を遺したのも、いかにも氏にふさわしいことと思われる。

住居を取り囲む森の中に、不思議な椎の巨木があった。「舎利体の背戸の椎の木」というのがそれである。わたくしが出した悔み状に対する利平氏からの返事の末に、たまたま「椎の老樹」と題する故人の一文が書き添えてあった。あとの歌の解説の役もつとめてくれると思うので、つぎに掲げることを許していただく。

空洞になった椎の老樹、それはまるで舎利そのもの、それがわが家の背戸の崖地にしがみついている。

推定樹齢、五百年を越す巨大な椎の老樹。やがて秋の光がわが家の森の樹々に、その手をさしのべるようになると、舎利体の老樹の肌のそこここに、くれないそめた何ものかが、姿をあらわしはじめる。

これは肝臓茸という木の子、やがてこの木の子が、手のひらほどに大きくなり、木肌一ぱいに、るいるいと積み重なる。これは山のビフテキともいわれるおいしい木の子。

いよいよ春ともなれば、家をかこむ森の木の中で、こま鳥が鳴き、いかるが鳴きはじめ、つづいて、舎利体の老樹の梢に鶯茶色のいのちの椎の新芽が開きはじめるのである。

一九六五年八月　　峰地光重

この文章の書かれた一九六五年、すなわち昭和四十年の二月に、広島大学で第四十四回ペスタロッチー祭が催された。この祭典には、教育功労者一人を対象として、ペスタロッチー賞が贈られるならわしになっていた。この年の受賞者には、生活綴方の道をひとすじに歩んできた峰地氏が選ばれ、受賞式に引きつづき、「求めてきた『生活』の理念」と題する受賞者の記念講演があった。

この講演は、氏が大正十一年に出版した『文化中心綴方新教授法』の中で、「生活指導」ということばをはじめて成語化して世に問うて以来、ひとすじに求めてきた「生活」の理念を明らかにしようとしたものである。氏はあくまでも「生活」を上位概念とする立場をとり、その「生活」を概念規定して、「生命が対象と交渉をもつその相である」とする。わたくしは、「生活」を、生命が対象と交渉をもつその相であるとする考え方に心ひかれるものがあった。それについて氏は、「ここでいう生命とは、教師・児童・教材の生命をさします。それら三者が、調和ある交渉をなしとげるとき、教師・児童はもとより教材までも成長する」（受賞者講演要項）と主張する。

教材が成長する――というのはどういうことか。これについては、「たったひとりの画家北斎の富嶽三十六景の出現によって、富士山の山形も、色も、見かわるように成長した事実は、誰しも認めるところであります。子どもの場合でも、このことは可能であります」（同上）とし、つぎのような児童の実作が引用されるのである。

ねばつつじ

みろくさんから　おりるとき
ねばつつじのはなを　とりました
ひとつむねにつけて
くんしょうだと　いいました
ぎょうさんむねにつけました
そして　はなうりむすめ　といいました
ほおのはをとって
かさにかぶりました

＜一年　松田かなえ＞

この詩は、峰地氏が昭和二十七年の春から四年間在職した、岐阜県多治見市池田小学校つづ原

分校での実践記録『はらっぱ教室』に載っている。この書を生み出したつづ原分校時代は、みずから「教育堪能期」と呼んでいるように、その理論が、快適なまでの実践によって検証され、氏に教師としての円熟をもたらした時期でもあった。前出の講演要項には、この詩を引いたあとに、こんな説明がつけ加えてある。――「標高四百三十六メートルの、平凡なみろく山が、この一作によって、すばらしい楽園として、成長したといえます。教材が成長したばかりではありません。教師である私も、学級の子どもぜんたいも、いっしょに成長したのです」。

わたくしには、この評語も重要であるが、『はらっぱ教室』で、この作品のあとにつけ加えられた「かいせつ」も、この詩の意味を考えるうえで、同じく重要であった。すこし長文にわたるが、あえて引用させてもらうことにする。

これは、作者かなえさんが、入学して間もない、五月の中ごろに、かいた詩です。ねばつつじは、この地方では五月も十日すぎて、さきはじめるのです。

みろくさんというのは、小さな山ですが、南には名古屋、北にはアルプスがながめられる、とても見はらしのいい山です。この山には、みろくぼさつの石の像があります。昔、加藤清正が、名古屋城をたてるとき、この方向が鬼門にあたるというので、ここにみろくぼさつをまつったのだといわれています。

いつものように、わたしのところに遊びにきて、かなえさんは、みろくさんのぼりのおもしろかったことを、さかんにおしゃべりしていました。そこで、わたしは、「しらない文字は、おしえてあげますよ。かいてごらん」と、いいますと、えんぴつをなめなめ、紙にむかいました。そのころ、かなえさんは、まだかな文字を、全部は、おぼえていなかったのです。「『ろ』という字は?」とか、「くんしょうの『しょう』は?」とか、いうふうに聞きながら、書きあげたのが、この詩です。

ねばつつじの花を、ぎょうさんむねにつけて、自分を、はなうりむすめになぞらえ、また、ほおの葉をとって、かさにかぶったところなど、なかなか、おもしろいではありませんか。

この「かいせつ」に助けられて、二度三度と「ねばつつじ」の詩を読みかえしているうち、心の中に灯が点ぜられたような感じに誘われていった。峰地氏のいうように、この一作によって、教師・児童・教材の三者が成長したばかりでなく、そういう教育の場のそとに立つ、その詩の読者としてのわたくしまで、なにがしかの成長をとげたといえるかも知れない。詩とは、文学とは、もともとこのような意義を、人生のうえにもつものだといってよいのだろう。

在りし日の峰地光重氏の温顔を思い浮かべ、追慕の情に堪えず、思うところを書き綴ってみた。ご冥福を祈る。

（四四・四）